

報 告

母性看護学実習終了時における男子学生の心理状態に関する質的研究

瀨瀬祐子，中田久恵，大槻優子

つくば国際大学医療保健学部看護学科

【要 旨】本研究は、男子学生が母性看護学実習を履修する上でどのような指導が必要であるか、その具体的な指導方法を検討するための基礎資料を得ることを目的とし、実習終了時の男子学生の心理状態について分析したものである。対象はつくば国際大学で平成27年度に母性看護学実習を履修した看護学科4年生男子13人であり、実習終了時に半構造的面接を行った。その結果37の主なコード、9のサブカテゴリー、4つのカテゴリー【男性であることによる躊躇】【分娩見学に対する両価的感情】【受け持ち対象との関わりの満足感】【実習環境の安心感】が抽出された。

男子学生は、母性看護学実習終了時の心理状態として、男性という立場を強く意識し、実習に対する困難感を抱いていた。しかし一方では、実際の学習体験から、達成感や安心感など肯定的な感情を抱いていることが明らかになった。

本研究の結果により、男子学生が自己の性を強く意識することがあることを認識し、母性看護学実習に対する達成感や満足感につながる男子学生の特徴を生かした実習が行えるよう、指導内容の検討が必要であることが示唆された。

キーワード：母性看護学実習，男子学生，心理状態

I. 序論

近年、看護師を目指す男子学生は増加しており、男性看護師就職者数は、2004年を100とした場合の指数において、2016年には221.4と、約2.2倍に増加している（日本看護協会，2017）。当大学看護学科においても、2018年4月現在看護学科全体の約20%が男子学生であ

り、年々増加傾向にある。

母性看護学実習は、1989年の第二次保健婦助産婦看護婦養成所指定規則改正（第二次カリキュラム改正）により、実習内容の男女統一化が図られた。第二次カリキュラム改正により男子学生は、それまで精神看護学実習に置き換えられてきた母性看護学実習を履修することとなった。しかし、男子学生が母性看護学実習を行う上で経験する困難（荒川，2007）や母性看護学実習に伴う技術経験など（川村他，2003；笹木他，2011）の先行研究から、母性看護学実習を履修する上で様々な困難な状況が存在していることが明らかにされている。羽田野ら（2014）は、母性看護学実習における男子学生について「様々な困難が存在しており、

連絡責任者：瀨瀬祐子

〒300-0051 茨城県土浦市真鍋6-8-33

つくば国際大学医療保健学部看護学科

TEL: 029-826-6622

FAX: 029-826-6776

E-mail: y-kouketsu@tius.ac.jp

それらの困難は少子化や高齢妊娠・出産の増加、ART（生殖補助医療）による妊娠・出産の増加、看護師養成機関及び看護師養成数の増加、男子看護学生の増加、産科医療施設の減少等々の社会構造の変化を受け、今後も続いていくことが予想される」と述べている。このような男子学生の母性看護学実習における困難な状況に対して、受け持ち妊産褥婦の理解を促す関わりや実習に対する取り組みを支援する関わりなど、男子学生の性差に配慮した看護教育の必要性（畠中他, 2007；二川他, 2015；伊藤他, 2008）が示唆されている。

しかし、その具体的な指導方法については、導きだすに至っていないのが現状である。そこで本研究は、男子学生の母性看護学実習終了時における心理状態を分析し、実習における具体的な指導方法を検討するための基礎資料を得ることを目的とする。

方法

実習期間及び内容

つくば国際大学における母性看護学実習は、4年次前期2単位（90時間）で行っており、1週目に外来実習、2週目に病棟実習を行っている。外来実習では、主に産婦人科クリニックでの実習、市町村保健センターや各実習病院で行う母親学級の見学実習を行っている。病棟実習

では、母子一組を受け持ち看護過程の展開をしている（表1）。

グループ編成と指導体制

1グループは6～8人で編成し、グループ内に男子学生を1～3人配置している。外来実習は、1グループをさらに1～5人の少人数に編成し、病棟実習では、男子学生と女子学生をペアとして、1組の母子を受け持たせている。指導体制は、実習担当教員と臨床実習指導者2名が常時同行し指導を行っている。

調査対象

平成27年度母性看護学実習を履修する看護学科4年生男子学生14名に対し研究協力の依頼を行い、同意の得られた13名を対象とした。

調査期間

平成27年4月から平成27年7月

データ収集方法

実習終了後、以下の4点（①～④）をインタビューガイドとし、半構造的面接を行った。内容は対象学生の同意を得た上で、ICレコーダに録音し、逐語録を作成しデータとした。

表1 A大学における母性看護学実習期間及び内容（平成27年度）

週	曜日	実習内容
第1週目 外来実習	月～土 *	<ul style="list-style-type: none"> 保健センター、実習施設での母親学級の見学 産婦人科クリニックでの見学実習（女子学生のみ） 学内での病棟実習に向けた指導案作成及びロールプレイ
第2週目 病棟実習	月～木	<ul style="list-style-type: none"> 母子一組を受け持ち褥婦・新生児の看護過程の展開 分娩見学
	金	記録の整理・まとめ、担当教員との個別面談

*母親学級の見学実習が土曜日の場合、休日を平日に振り替えている。

- ①産科病棟の環境や受け持った妊産褥婦について
- ②学習内容に関する事
- ③学生同士の関係性
- ④教員・指導者の指導について

分析方法

データの分析は、質的帰納的研究法を用いた。面接によって得られたデータから、実習終了時に感じた学生の心理状態を表す文章を抜き出した。次に、意味内容を損なわないように要約しコード化した。それらのコードを、類似性・同質性に基いて分類集約し、さらに抽象度を上げてサブカテゴリー、カテゴリーとした。

分析の全過程において、母性看護学を専門とする研究者3名が意見の一致を見るまで検討を重ね、解釈の信頼性、妥当性の確保に努めた。

倫理的配慮

研究対象である男子学生14名に対して、本研究の目的および方法について、実習全体オリエンテーション後に、研究説明書を用いて研究への協力を依頼した。研究協力は自由意志であること、また不参加の場合でも母性看護学実習の評価には影響が無いこと、研究協力に同意した後でも、同意の撤回が可能であることを保証した。研究協力に対し強制力が働かないように、考える猶予として1週間を設け、同意する際は回収箱に投函してもらうことを説明した。インタビューを行う際は、口頭にて研究の目的、方法を説明した。さらに、研究への協力を辞退した場合でも、学生に不利益のない事、発言内容についていつでも撤回可能であることを説明し、プライバシーが確保できる個室で行った。インタビュー内容は、個人を特定できないようにデータ処理をし、番号整理とし匿名化を行った。さらに本研究のデータは、全て専用のUSBに保存し、施錠可能なロッカーで保存を行った。使用したデータは、研究終了後全て消

去すること、研究結果の公表については、学会ならびに学術誌などに発表する事を説明した。

本研究において利益相反に相当する事項はない。なお、本研究はつくば国際大学倫理委員会の承認（第26-18号）を得て実施した。

結果

得られたデータから、実習終了時の男子学生の心理状態を表す文章を抜き出しコード化した。その結果、37の主なコードが抽出された。さらに抽出度をあげ、サブカテゴリー、カテゴリーに分類し、【男性であることによる躊躇】【分娩見学に対する両価的感情】【受け持ち対象との関わりの満足感】【実習環境の安心感】の4つのカテゴリーが抽出された（表2）。以下本文においてカテゴリーを【】、サブカテゴリーを〔〕、主なコードを〈〉と表記し、各カテゴリーの内容について述べる。

1. 【男性であることによる躊躇】

このカテゴリーは、[世代の近い対象に対する戸惑い][受け持ち女性への遠慮][女性の外性器観察に対する困惑感]の3つのサブカテゴリーで構成された。母性看護学実習は、受け持つ対象が主に成熟期の女性であるため、学生自身と世代が近く〈受け持ちが20代だったので、見学しても良いと言われても遠慮してしまった〉〈対象が若いので、緊張して受け持ち褥婦の部屋に入れず、コミュニケーションがしづらかった〉と[世代の近い対象に対する戸惑い]を抱いていた。また、〈受け持ち患者の所に行けなかったのは、男性一人で行くと褥婦も戸惑ってしまうと思った〉と[受け持ち女性への遠慮]がみられており、特に〈褥婦のケアや、授乳などに抵抗があった〉〈悪露について聞きづらかった〉と[女性の外性器観察に対する困惑感]を抱いていた。

表2 男子学生の母性看護学実習終了時における心理状態

カテゴリー	サブカテゴリー	主なコード
男性であることによる躊躇	世代の近い対象に対する戸惑い	受け持ちが20代だったので、見学しても良いと言われても遠慮してしまった 対象が若いので、緊張して受け持ち褥婦の部屋に入れず、コミュニケーションがしづらかった 今回の受け持ちは年齢が高めだったので大丈夫だったが、20代になるととても良いと言われても遠慮してしまうと思う
	受け持ち女性への遠慮	受け持ち患者の所に行けなかったのは、男性一人で行くと褥婦も戸惑ってしまうと思った 男性受け持ちOKと言っているが、遠慮してしまった カーテンを引いているので中で何をしているか分からなく、部屋に入りづらかった
	女性の外性器観察に対する困惑感	子宮底の高さなど確認する時に身体に触ったりするので、抵抗ややりづらさがあった 子宮底を測定させてほしいと、自分の口から言えなかった 褥婦のケアや、授乳などに抵抗があった 悪露について聞きづらかった
分娩見学に対する両面的感情	分娩見学の満足感	分娩を見て良かったと思った 分娩に対し、画面上で実際に生まれる場面などを見たり、声を聞いたりしているうちに、興味がわいた 分娩見学は、まさか見れるとは思っていなかったもので、感動して泣きそうになった
	分娩見学に対する抵抗感	分娩に最初に立ち会ったのが、自分だったので患者の夫に申し訳ないというか、少し罪悪感を感じた 分娩の場に入っているのかという感じがあった 分娩の場にどうしていいかわからなかった 部分的な関わりであったが、抵抗があった 分娩の音などに圧倒された
受け持ち対象との関わりの満足感	妊産褥婦ケアの充実感	実習やってみてアセスメントの大切さや関わり方が学べたので、結構満足度は高かった 思ったより男子学生も色々実習ができた 実習前だと講義とか演習を通して学んだが、実際病棟に行くことでより多くを学び、充実したいい実習だった ケアを実施してよいのか迷いがあったが、実習指導者が実施可能か言ってくれることで安心してできた イメージしにくい部分、自分が分からない部分については詳しく説明して頂けたので、結構助かった 男子学生にも色々な経験ができるように指導者と教員が配慮してくれて、学びを深めるにはいい実習だった
	新生児ケアの達成感	本当に可愛くて日々顔が変わり変化が目に見えてわかったので、すごい勉強になった 実際赤ちゃんに触れることが出来たので、とても良い経験になった 赤ちゃんと接することができて楽しかった 授乳に行っている間に自分の記録の不足していた部分の説明や、指摘されたことに対する修正ができ時間を有効に使えた 新生児と関わるのが結構出来、いろんな検査であったりや、受け持ちでない赤ちゃんのケアをする機会もあったので良かった
実習環境の安心感	*実習指導者の学生に対する対応の快さ	女子学生と同じように接してもらった 授乳の観察以外女子学生・男子学生の隔たりを感じなかった 臨床実習指導者は、男性に対して排他的ではなかった
	病棟に居場所がある安堵感	男子学生として変に意識することなく出来た 居場所がないと感じることは無かった 男性がいることに対して違和感を感じなかった 男性医者もいっぱいいたので大丈夫だった 思った以上にやりやすかった

*実習指導者とは、実習担当教員・臨床実習指導者の両方を含む

2. 【分娩見学に対する両価的感情】

このカテゴリーは、[分娩見学の満足感][分娩見学に対する抵抗感]の2つのサブカテゴリーで構成された。分娩見学実習に対しては、〈分娩見学はまさか見れるとは思っていなかったたので、感動して泣きそうになった〉〈分娩を見て良かったと思った〉と、実際に分娩室に入室し見学をしたことで、[分娩見学の満足感]を抱いていた。一方で、〈分娩の音（産婦の声やモニターなどの機械類の音）などに圧倒された〉〈分娩の場にどうしていいのかわからなかった〉と分娩の場という特殊な雰囲気に対し[分娩見学に対する抵抗感]を感じていた。

3. 【受け持ち対象との関わりの満足感】

このカテゴリーは、[妊産褥婦ケアの充実感][新生児ケアの達成感]の2つのサブカテゴリーで構成された。男子学生は、実際に病棟実習で色々経験できたことで〈思ったより男子学生も色々実習が出来た〉〈実習前だと講義とか演習を通して学んだが、実際病棟に行くことでより多くを学び、充実したいい実習だった〉と[妊産褥婦ケアの充実感]を得ていた。特に新生児のケアに対しては〈本当に可愛くて日々顔が変わり変化が目に見えて分かったので、すごい勉強になった〉と[新生児ケアの達成感]を抱き、充実した実習を行うことができていた。

4. 【実習環境の安心感】

このカテゴリーは、[実習指導者の学生に対する対応の快さ][病棟に居場所がある安堵感]の2つのサブカテゴリーで構成された。男子学生は、〈臨地実習指導者は、男性に対して排他的ではなかった〉〈女子学生と同じように接してもらった〉と女子学生と区別なく接してもらったことで[実習指導者の学生に対する対応の快さ]を感じていた。また、実習が円滑にできたことで〈居場所がないと感じることは無かつ

た〉〈男性がいることに対して違和感を感じなかった〉と[病棟に居場所がある安堵感]を得ていた。

考察

本研究から導き出された4つのカテゴリーから、母性看護学実習終了時の男子学生の心理的特徴と、母性看護学実習における具体的な指導方法について考察する。

1. 母性看護学実習終了時の男子学生の心理的特徴

母性看護学実習では、妊産褥婦や新生児を受け持ち、看護を展開する。受け持つ対象は成熟期の女性であり、他の領域実習で受け持った対象者と比較し、学生自身と年代が近い。さらにケアの内容が乳房や陰部など女性の外性器の観察を行うことが必要なため、青年期の男子学生にとって羞恥心を伴う事が多く、自己の男性性を過剰に意識し【男性であることによる躊躇】を感じていた。自己の男性性を意識した感情は、これまでの先行研究でも明らかにされている（荒川, 2007; 大野他, 2018）。大野ら（2018）は「母性看護学実習における男子学生は、対象中心の考えではなく、自分中心の意識へと傾くにつれて、性差の意識が強くなり困難感が生じる」と述べている。また男子学生は、過去に女性患者を受け持つ機会が少ない（瀬瀬他, 2017）ことも自己の男性性を意識した感情に影響していると推察する。この感情は、看護学生という立場で看護を学ぶ意識ではなく、学生自身の男性としての意識が優位となり、感じたものではないかと考える。

次に分娩見学時の心理状態について考察する。分娩見学は、実際に出生児の第一啼泣を聞くことで、生命の誕生に感動し、分娩に対する興味が湧くなど、[分娩見学の満足感]を抱く実習内容であったと考える。しかし一方で、分

娩の様子が想像できないことや、分娩に伴う出血など生々しい光景から、不安や無力感、恐れといった否定的感情がみられることも報告されている(竹原ら, 2014)。実際に男子学生は、〈分娩の場に入っていいのかという感じがあった〉〈分娩の場にどうしていいかわからなかった〉と、夫以外の男性である自分が分娩見学を行ってよいのかという葛藤や、産婦の苦しむ姿や声に圧倒され、分娩室への入室をためらい、[分娩見学に対する抵抗感]を抱いていた。このように男子学生は、満足感を抱く一方で抵抗感も抱く【分娩見学に対する両価的感情】がみられており、特に夫に対して感じる葛藤は、男子学生特有の感情ではないかと考える。

母性看護学実習における男子学生は、妊産褥婦・新生児との関わりの中で、実際に様々な経験を通し【受け持ち対象との関わりの満足感】を感じていた。母性看護学実習は、母子一組を受け持ちケアを行う形態をとっているが、先行研究から「患者や家族から受け持ちを拒否」「患者との関わりの制限」など、不安を抱えて実習に臨んでいることが、明らかになっている(荒川, 2007; 瀬瀬他, 2017; 大野他, 2018)。しかし伊藤ら(2008)は、実際に受け持ち対象との関わりを通して、「学生は不安や緊張を抱えながらも実習を経験することで、自分に対する理解や自信を深め、自己受容性を徐々に高める」と述べている。このことから、様々なケアを実施できたことによる満足感や達成感が自信を深め、自己受容性を高める機会となったのではないかと考える。

男子学生が満足感を感じた要因の一つとして、女性が多い産科病棟のなかで、居場所を見い出せたことにあると推察する。高橋ら(2008)が、「青年期の人々にとって居場所は、安心感を与えられ、他者との連帯感や自分の存在を実感できる場である」と述べている。青年期の学生にとって居場所は、安心感につながる重要な場所である。しかし母性看護学実習における男子学生は、女性が多い環境において「居場所がない」と感じ、居心地の悪さを感じていること

が明らかになっている(荒川, 2007)。本研究の結果においては、臨床実習指導者や実習担当教員が、女子学生に対する指導と同じように、男性を特別視しない態度や、男性医師など病棟に男性がいることで、「自分がここにも良いのだ」という【実習環境の安心感】が、居場所を見だし、満足感につながったのではないかと考える。

2. 母性看護学実習における具体的指導方法

本研究の結果により、男子学生は母性看護学実習において自己の「男性」という性を強く意識した感情が、実習を困難にする要因であることが推察された。これは、男子学生の実習開始時において抱いていた“自己の男性性を意識した感情”(瀬瀬他, 2017)と同様に、実習終了時においても存在することが明らかになった。

母性看護学実習を履修する男子学生は、「男性」という性に執着し、看護学生として学ぶ意識ではなく、「男性」としての意識で妊産褥婦に目を向けてしまいがちである。指導においては、男子学生が性を意識しすぎないようにすることが必要であると考えられる。具体的には、近年父親の育児参加を推進している中で、同性である父親への関わりを促すことや、学生にとって抵抗感の少ない新生児のケアを優先的に経験させるなどが考えられる。

また、分娩見学実習では、生命の誕生の感動などのポジティブな側面のみならず、抵抗感や葛藤等の感情を抱くこともあることを指導者は認識しておかなければならない。そのうえで、学生自身の意思を尊重しつつ、産婦や家族と一緒に出産場面を共有体験できるよう、経過の早いうちから産婦と関わり、具体的な援助を促すことが必要であると考えられる。

さらに男子学生が、看護を学ぶ学生としての意識で実習が望めるよう、実習環境を整えることが必要である。臨床指導者や教員は、男子学生を特別視せず、一部授乳の観察などの制限以外は、積極的に実習できるように配慮する。援

助を行う際は学生に声をかけ、受け持ち褥婦と円滑なコミュニケーションが取れるように橋渡しの役割をするなど、男子学生が実習を行いやすい環境をつくることが大切であると考え。

これらの具体的な指導方法を実践することで、男子学生は母性看護学実習での学びを深め、学生自身が母性看護学実習を行う意義を見出し得るのではないかと考える。

研究の限界

本研究は、1つの大学学科での少数例の調査であることや、実習施設の環境の違いによる影響により、客観性や普遍性に問題があり、また受け持ち対象の特徴（初産婦、経産婦、対象年齢など）により、男子学生の実習内容に偏りが生じる事は否めない。調査対象が男子学生のみであるため、女子学生の心理状態との比較検討をしていないことで、「母性看護学実習終了時における男子学生の心理状態」として、一般化するのには限界がある。しかし、本研究の結果から、母性看護学実習終了時の男子学生の心理的特徴を把握することができた。今後は、女子学生の心理状況の比較など、継続して調査していくことが必要と考える。

結論

男子学生の母性看護学実習終了時の心理状態として、【男性であることによる躊躇】【分娩見学に対する両価的感情】【受け持ち対象との関わりの満足感】【実習環境の安心感】の4つのカテゴリーが抽出された。

本研究の結果をふまえ、男子学生の特徴を生かした指導方法の必要性を検討していきたい。

謝辞

本研究に協力を頂きました学生の皆様に深く感謝いたします。

参考文献

- 荒川直子（2007）母性看護学実習において男子学生が経験する性差に関わる困難. 看護教育. 38：123-125.
- 伊藤千恵, 松井幸子, 大野絢子, 早川有子（2008）男子学生の母性看護学実習における教育的配慮の考察. 群馬パース大学紀要. 6：81-89.
- 川村千恵子, 井端美奈子, 田原町子（2003）男子学生の母性看護実習に伴う経験. 大阪市立看護大学医療技術短期大学部紀要. 9：1-7.
- 大野理恵, 長鶴美佐子（2018）男子学生が母性看護学実習前から実習終了までに抱く困難感. 看護教育. 48：79-82
- 瀬瀬祐子, 中田久恵, 大槻優子（2017）男子学生の母性看護学実習開始時における心理状態に関する研究. 日本医学看護学教育学会. 26（1）：22-26.
- 笹木葉子, 小堀ゆかり（2012）母性看護学実習における学生の技術経験状況調査—学生の母性看護学実習技術チェックリストから—. 北海道文教大学研究紀要. 36：81-90.
- 鈴木樹里（2004）分娩見学実習が看護学生の分娩に対するイメージに与える影響. 神戸市看護大学短期大学部紀要. 23：95-100
- 高橋晶子, 米川勉（2008）青年期における「居場所」の研究. 福岡女学院大学大学院紀要. 5：57-66.
- 畠中香織, 峯馨, 林ひろみ（2017）母性実習における男子学生の実習前・実習中・実習後の体験. 千葉県立衛生短期大学紀要. 26（1）：89-95.

- 羽田野花美, 末永芳子, 中島由紀子, 多久島寛
孝 (2014) 男子学生の母性看護学実習の
現状と課題. 保健科学研究誌, 11 : 1-7.
- 二川里香, 松井弘美, 長谷川ともみ (2015)
男子学生の視座から捉えた母性看護学実習
における学習過程. 母性衛生, 5 (4):
659-667.
- 矢原隆行 (2001) 看護教育の場におけるジェ
ンダー構築, 看護教育, 42 (1): 34-38
- 日本看護協会ホームページ. 看護統計資料室
[https://www.nurse.or.jp/home/statistics/
index.html](https://www.nurse.or.jp/home/statistics/index.html) (閲覧日: 2018年7月28日)
- 厚生労働省ホームページ. 平成28年我が国の
保健統計 [http://www.mhlw.go.jp/toukei/
list/130-28.html](http://www.mhlw.go.jp/toukei/
list/130-28.html) (閲覧日: 2018年7月28日)

Report

A study of the psychological condition of male students after the maternity nursing practical training

Yuko KOKETSU, Hisae NAKADA, Yuko OOTSUKI

Department of Nursing, Faculty of Medical and Health Sciences, Tsukuba International University

Abstract

We aimed to obtain basic data for specific guidance methods. This study examined the psychological state of male students after the maternity nursing practical training and what kind of guidance is required for male students taking such training. The subjects were 13 male 4th-grade maternity nursing studies students from the class of 2017 at Tsukuba International University. A structured interview was conducted after the practical training. As a result, 37 main codes, 9 sub-categories, and 4 categories [Hesitation due to being male] [Pros and cons feelings for a parturition visit] [A sense of satisfaction with the relationship with the woman resting after childbirth] [Reassurance to practice environment] were compiled.

In terms of their psychological state after the training, male students were strongly aware of the negative emotions relating to the position of men in the nursing setting and experienced difficulty with maternity nursing practical training. However, male students had positive reactions such as a feeling of accomplishment, a sense of security gained from the learning experience. The results of this report indicate that it is important to recognize that male students are strongly aware of their gender status and to provide practical training that takes account of this. Further investigation regarding the completion of maternity nursing studies by male students and their associated sense of satisfaction is necessary.

Keywords: Maternity nursing practice, Male student, Psychological condition